

R・スタベンハーゲン著、山崎春成・
原田金一郎・青木芳夫 訳

『開発と農民社会——ラテン
アメリカ社会の構造と変動——』

岩波書店 1981年 xii+328 ページ

I

著者のロドルフォ・スタベンハーゲン (Rodolfo Stavenhagen) はメキシコの社会人類学者、農村社会学者であり、エル・コレヒオ・デ・メヒコ (El Colegio de México, メキシコ大学院大学) の社会学研究センターの初代所長、メキシコ教育省の民衆文化局長を経て、現在パリ、ユネスコ本部の社会科学とその応用担当の事務次長の職にある。ラテンアメリカおよびアフリカでの農村実態調査の経験に基づいて、第三世界の農民社会、文化についての数多くの著作、論文を発表し、国際的に知られている。また国連大学の顧問として数回来日し、わが国でも名を知られるようになった(注1)。

本書は著者が日本語版のために自選した8編の論文により構成されている。8編のうちの4編(本書の1, 2, 5, 8章)と序文は、著者の論文集『社会学と低開発』(注2)に収められたものだが、他の4編はそれぞれ別の場所に発表されたものである(注3)。『開発と農民社会』という本書の表題は著者が日本語版のためにみずから選んだもので、現代世界の全体的な経済的、政治的構造によって条件づけられた途上国の開発過程の中での農民社会の変動、というのが本書の全体を貫く中心テーマである。

このテーマにとりくむスタベンハーゲンの方法論的立場とその位置づけに関しては「訳者あとがき」に譲る。ここで山崎春成氏が述べているように、全体的構造のとりえ方において著者は多分に「従属理論」的である。しかしA・G・フランクを中心に形成されたいわゆる「従属理論」とスタベンハーゲンの立場は併存し、相互に影響しあうことはあったにしても、互いに独立のものともみなすべきであろう。

評者として一つコメントをつけ加えるならば、スタベンハーゲンを農村社会学者、社会人類学者であるといった場合に、それは彼がこの二つのディシプリンを身につけ、それを時と場合によって使い分けているという意味ではないことである。発展途上国とくに複数民族国家に

おいては、マージナル(周縁的)なエスニック・グループの問題はただちにその国の農民社会の主要部分に関わる問題であり、それは決して現代社会から隔絶した特殊なグループの問題ではない。したがってこうした地域の農民社会の分析に際してはマージナルなエスニック・グループの問題は避けてとおることができない。そこでは農村社会学的アプローチと社会人類学的アプローチとは不可分に結びついており、両者の間には一線を引きがたいのである。

本書はさきにも述べたように「開発過程のなかでの農民社会の変動」というのが中心テーマであるが、実際に各論文で扱われている問題はきわめて多岐にわたる。これを大雑把に次のように分類することができよう。第1に農民社会の問題をはるかに越えて、それを包み込んでいる開発途上国ないし現代世界の全体的構造に言及しているもの(第1, 第2章)。第2に、農民社会とそれを包摂している全体社会との構造的連関にはもちろん言及するが、主として農民社会そのものを中心課題とするもの(第5, 第6, 第7章がこれに相当する)。第3に周縁的なエスニック・グループとしてのインディヘナの問題を中心課題とするもの(第3, 第4章)。第4に社会科学者の社会的実践の問題を扱ったもの(第8章)である。以下ではこの順序にしたがって本書の内容の検討を行なう。

II

第1章「ラテンアメリカについての七つの謬論」はスタベンハーゲンの諸論文の中でも最も初期に発表されたもので、扱うテーマが包括的、一般的なだけに、おそらく彼の数多い論文の中でも最もよく知られたものであろう。ここでとりあげられる七つの誤まった命題のうちで、著者の批判の焦点をなすのがいわゆる「二重社会論」(第1命題)である。それは、ラテンアメリカ諸国には「旧式」(archaic)社会と「近代」社会という二つの異なった、ある程度まで自立した社会(ないし地域)が存在し、前者は伝統的、農業的で、停滞的ないし退行的な社会であり、後者は近代的、都市的、工業的で、動態的な発展しつつある社会である、とするものである。そして「旧式」社会は経済発展にとって障害となっているのに対して「近代」社会は経済発展の中核になっている、という図式である。

これに対して著者は、両者は互いに独立に存在するのではなく、両者間の関係は「この二つの極を不可欠の構

成要素とする単一の統一された社会の機能」(4ページ)をあらわしており、「この二つの極は、単一の歴史的過程の経過のうちにその起源をもっている」(同)、すなわち一方の発展は他方の犠牲によって生じたものであると批判する。そして「二重社会論」に代わって「国内植民地主義」(internal colonialism)の命題を提示する。すなわち一国内における発展した地域と低開発地域との関係は、先進国と植民地との関係に擬せられるべきものであるとする。

この他に、ラテンアメリカの発展にとって中間階級の果たす役割を評価する命題(第5命題)、ラテンアメリカにおける国民統合は異種族混血の所産であるとする命題(第6命題)に対する批判などが注目すべきものである。後者では、生物学的文化的混血は、それ自身ではなんら現存の社会構造の変化を意味せず、国民統合は、新しい生物学的文化的カテゴリーの発達によってではなく、国内植民地主義の消滅によって達成されるであろう、と主張する。

第2章「ラテンアメリカの未来——低開発と革命のはざまでは、ラテンアメリカにおける「低開発の真の兆候である主要な構造的な不均衡」として、まず第1に農業における構造的な不均衡をとりあげ、近年における農業生産の近代化のこころみは農業構造の一層の分極化を助長していると指摘する。そして農業構造の分極化の進行と、近代工業部門が十分迅速に余剰労働力を吸収しえないことの帰結として「構造的周縁性」がもたらされるという。著者によれば周縁性の概念は、「ラテンアメリカの人口のうち、雇用構造の中でのその不安定かつ不確実な地位の結果として、最低の所得と生活水準に甘んじ、それゆえ経済成長の恩恵に浴しえない部分」(48ページ)である(注4)。そして周縁性とは「システムの外」におかれているのではなく、特定の経済システムと特定の権力構造(その最下層)に統合された人々であり、「現在の社会的経済的現実のもとでは、経済が成長すればするほど、周縁性もまた増大する」(50ページ)のである。

最後に著者はラテンアメリカの未来にとっての主要な代替モデルとして、(1)周縁化をもたらすような現在の従属的發展の継続、(2)自立的な資本主義的發展、(3)革命的社會主義、の三つを提示し、第3のモデルこそが最も望ましいものとしているが、そこにいたる道の提言はあまりにも漠としたものといわざるをえない。

III

第5章「周縁性、参加、農業構造——ラテンアメリカにおける」は、社会参加という側面から近代化、開発の問題を論ずる。前述の「国内植民地主義」の状況のもとでは、国内の「中枢」(メトロポリス)的中心に生じる近代化過程は、植民地化されたセクターの各集団を国の全体的な社会的政治的構造のなかに包摂してゆくが、このことはかならずしも包摂された各集団の住民を「参加者」に転化させるものではなく、この包摂の過程と同時に、周縁化の過程が、都市でも農村でも進行する、としている。

本章の後半では、ラテンアメリカの農民を、(1)狭義の農民——かなりの自律性をもってその耕地を直接支配している、(2)アシエンダの住み込みのコロノあるいはペオン、(3)近代的プランテーションの賃金労働者、の三つの主要なタイプに分け、それぞれについて社会参加の問題を、土地改革過程における農民の組織化との関連で考察している。

第7章「基礎的ニーズ、農民、農村開発の戦略」では、農業生産を市場のための生産と農民世帯による自給的な生産とに分け、従来の農村開発戦略は一般に後者の生産に従事する伝統的な農民層をおきざりにしてきたとして、それに代わって農民経済の再生をめざす農村開発の諸戦略を提示している。しかしそれは概して総花的であって、具体化のための方策は明示されていない。

これに比べて農民層のおかれている現状を分析した部分にはすぐれた指摘がみられる。たとえば、「農業への資本主義の導入はしばしば勤労者の抑圧と搾取の伝統的メカニズムを強化してきた」(240ページ)、「第三世界の数多くの農民たちの真正の社会的経済的發展にとって一つの障害となってきたのが、ほかならぬこの農業の資本主義的發展なのである。」(240～241ページ)等である。

第6章「メキシコ農民の未来」は、前述の2章と異なり具体的に、大規模な土地改革を経た今日のメキシコの農業構造を分析した後、メキシコの農民にとっての未来の選択の可能性を四つ提示している。メキシコの土地改革に対する著者の評価は次の言葉に要約される。「1930年代における農民に対する大々的な土地の再分配。それにつづく30年間の近代的企業的〔農業〕部門の強化に向けられた農業政策。その結果は、少数のエリートへの富と諸資源の集中と、自給的農民と土地なき労働者という大多数の人々の周縁化の進行という農業構造の顕著な分

極化である」(259ページ)。

未来の選択の可能性としては、(1)周縁化、(2)先進工業諸国の資本主義的農業モデル、(3)農民化政策、(4)社会化、をあげている。(1)は現在の諸傾向が今後も続くかぎりたどるであろう道であり、最も望ましくない選択である。(2)が起こる可能性はまずない。(3)の「農民化」(peasantization)政策とは小農業者の生産基盤を強化し、その生産性と所得を上昇させる政策で、これまでも部分的には成功裡に実施されてきたものであり、今後も実行可能である。しかし著者は農民化政策だけでは分極化した発展と周縁化という方向を転換させることには成功しないとして、第4の選択を示す。

「社会化」政策とは、大多数の周縁的な農民の生活水準を引き上げることが意図した、農業部門発展の総合的計画化であり、その根幹として経済的に成り立ちうる最小限の経営単位をつくること、さらに協同的あるいは集団的な性格をもったより大きな生産単位を形成することが掲げられる。しかしその実現のための具体的なプランはここでは示されない。著者のいうように、これらの四つの可能な選択は「理念型として考察された歴史的な選択」として提示されるのである。

この他にメキシコの農業問題に関するスタベンハーゲンの論文としては、本書の「訳者あとがき」でも触れている「メキシコの農業構造の社会的諸側面」(注5)および『社会学と低開発』所収の「メキシコ農地改革における周縁性と参加」(注6)が重要である。また同書所収の「低開発諸国の農村共同体」(注7)は途上国における農村共同体の構造的問題を論じたものとして興味深い。

IV

第3章と第4章はインディオ(インディヘナ)という周縁的エスニック・グループを擁するラテンアメリカの複合社会、ないし民族、文化の問題を論じたものである。ラテンアメリカの中でも「インド・アメリカ」と呼ばれるような諸国では、その住民の構成は、インディオと、白人およびメスティーソの名で代表される混血という二つの主要分節に分かれると一般に理解されている。複合(plural)社会あるいは二重(dual)社会の概念である。第3章「ラテンアメリカにおける複合社会」では、著者は二重社会論的アプローチをかならずしも否定せず、「その含蓄するところを注意ぶかく見る必要がある」としながら、それに関わる三つの基本的な問題を検討する。すなわち、(1)現状をもたらした歴史的過程の性質、(2)複合

性あるいは二重性が維持されている社会システム全体の性質、(3)複合社会状況において、社会的経済的変化を生み出す方向に働く動的諸力および諸傾向の性質、である。

国民国家の発展に伴って、ラテンアメリカのいくつかの国では国民的統合の達成のためにインディオ文化を消滅させ、インディオを「国民文化」に同化または合体化させる努力がなされてきた。その結果インディオがインディオであることをやめるとき、彼は抽象的な「国民社会」にではなく、階級構造の最低階層に編入される。このことは周縁化の拡大過程を意味する。

著者は、ラテンアメリカのインディオ住民にとって望ましい将来の選択は、支配的なメスティーソ分節にインディオ文化が吸収されてしまうような社会的文化的融合主義(シンクレティズム)ではなく、インディオのエスニック・グループがメスティーソのそれと同じ平面で自律的文化発展をとげる可能性、文化的複合性という文脈のなかでの両者の共存にあるとみている。

このことが現実化されるためにはあくまでもインディオのエスニック・グループ自身の自覚が必要不可欠であるが、今日メキシコなどのインディヘナ住民の間からはそうした自覚に基づいた主張、運動が起こりつつあり、将来への展望をひらくものといえるであろう。

第4章「民衆文化と知的創造」では、まず文化の分析に関していくつかの視点を提示する。文化を、普遍的文化——地域的文化——国民文化——エスニックな文化という諸要素から成る大きな連鎖としてとらえる視点、文化についての階級的な視点、エリート主義的文化と区別して民衆文化に光をあてる視点である。そしてこれらの視点を相互に交差させるとき、「大体において、民衆文化は階級文化であり、それも下層階級の文化である。民衆文化は、しばしば、文化的ナショナリズムが鼓舞される根源であり、少数エスニック・グループの文化を表現するものである」(124ページ)ということになる。

次に具体的にメキシコにおける少数エスニック・グループであるインディヘナの文化がこれまでの国民統合化の政策によっていかなる状態に追込まれてきたかを述べ、インディヘナ文化が民衆文化として再生する可能性をさぐる。著者は、自由主義的思潮もマルクス主義思潮も、インディヘナの文化の有効性を疑問視し、インディヘナ文化の消滅は不可避的かつ望ましいものとする点で同罪であると断ずる。「現実には生きているインディヘナの文化、現代のエスニック・グループとその多様な文化表現に対する体系的な関心が、知的芸術的活動には……

まったく欠けている」(143ページ)、「メキシコに複数文化という現実があっても、それは国民的に意識されてはいない」(144ページ)と、著者の指摘はきびしい。最近までメキシコ教育省の民衆文化局長としてインディヘナ文化の再生に関わる仕事に携わってきた人の発言だけに説得力がある。

スタベンハーゲンによればインディヘナのエスニックな文化の復活とは、「インディヘナ共同体の成員たちが、いま現実に存在するその固有の文化の集団的創造に積極的に参加してゆくこと」(147ページ)である。そしてインディヘナ共同体とは本質的に農民の共同体であり、「すべての農民社会は、それぞれ、みずからがおかれている環境に適合した知識の集積をもっている」(147ページ)から、「資本主義的成長にかわるものとして提起される農村開発の新戦略は、……農民共同体の固有の価値や知識に基礎をおくものでなければならない」(148ページ)と、ここへきてインディヘナの文化——農民の民衆文化は農村開発戦略とからんで積極的に位置づけられる。本書の各章でいずれも未来への展望が述べられているが、この第4章の後半の部分が評者には最も説得的である。

V

第8章「応用社会科学の非植民地化」はこれまでの7章とはやや趣きを異にし、社会科学の知識の応用あるいは利用に関して社会科学者の果たす役割を論じたものである。これまで第三世界に関する社会科学(とくに人類学)的研究は、主として「抑圧されているものの研究」に外部から関心を注いできたものであり、支配集団が現状を維持するために用いる抑圧の多種多様な諸側面について、どれだけの研究がなされてきたのだろうか、と著者は批判する。人類学者の果たした役割については、とくにインディヘニスモ(注8)に関して批判が集中される(310~312ページ)。人類学者たちはインディヘニスモが立脚するイデオロギー的諸前提(いわゆるインディヘナ問題とはなにか、また一国の発展過程の本質はなにかという点での支配的な考え方と関連する)を問うことなく、インディヘナ共同体の文化変容、文化変動を促進し、インディヘナを国民社会に統合することに携わってきたが、この国民社会そのものの本質はほとんど分析されることがなかった。「彼らがぞくしている国民社会の本質的特徴……を認識することを拒むことによって、インディヘニスタ(注9)たちは、後進性の責任を、インディヘナ共同体そのものに、……おしつけたのである」(311ページ)。

著者は社会科学の研究者が今後とりうる選択として、(1)部品生産の組立ラインの労働者のように、製品が最終的には何に用いられるかを顧慮することなしに、ただ情報を生産しつづける、(2)現在の社会システムの継続性と安定性の基礎となっている諸前提を受け入れ、これを利用しつつ、社会についての支配的かつ確立された解釈に適合する知識を生産する、(3)既往の説明にかわる新しい説明を提示することにつとめる、の三つをあげ、第3の選択こそが最も望ましい道であるとする。知識の蓄積は変革のための道具となりうるし、またならなければならない、そのためには従来の参加的観察をのりこえる活動家的観察(activist observation)と呼びうる手法が必要であると著者はいうが、これはいうは易く行なうは難しいことがらであろう。

VI

以上がラテンアメリカを中心に据えた第三世界の開発過程における農民社会、および農民社会の一部を構成するところの周縁的なエスニック・グループの構造と変動を扱った本書の各論文の概要である。ここでとりあげられる問題は多岐にわたっているが、最初に述べたように全体を貫く中心テーマは一貫している。各論文はいずれも歴史的過程および現状の分析と、将来への展望という部分から構成されているが、評者がこれまでたびたび指摘したように、現状の分析に関してはたいへんすぐれているが将来への展望に関してはいささか漠としたものという印象を否定できない。著者が最も望ましいものとしてあげている将来の選択についても、その実現への具体的な方策は提示されずに終わっている。また現状の分析に関しても、より具体的に特定の農民共同体、ないし特定のエスニック・グループに関する実証的な事例研究を提示した上での分析であったならば論旨はいっそう説得的であろうと思われる。ともあれラテンアメリカの農民社会の構造をさまざまな視角から論じた、著者の自選による論文集が翻訳、公刊されたことは、日本の研究者および一般読者にとって知的刺激となることは間違いない。

訳文に関してはとくに問題はない。各章末に懇切、丁寧な訳注がつけられており、大いに参考になる。ラテンアメリカ研究の初学者にとってはこの訳注を読むだけでもプラスになろう。こまかいことだが、ブラジルに関する固有名詞のいくつかがスペイン語読みになっていた点と、メソアメリカについての本文〔 〕内の説明(7ページ)は不正確な点に気づいた。

(注1) 著者の略歴と主要著作については、「訳者あとがき」317～318ページを参照されたい。

(注2) Stavenhagen, R., *Sociología y subdesarrollo*, México, Nuestro Tiempo, 1972.

(注3) 各論文の発表場所等については、「訳者あとがき」325～327ページ。

(注4) 周縁性の概念に関しては第5章でより詳しく扱われる(168～174ページ)。

(注5) Stavenhagen, R., “Social Aspects of Agrarian Structure in Mexico,” in *Agrarian Problems and Peasant Movements in Latin America*, ed. R. Stavenhagen, Garden City, Doubleday, 1970, pp. 258-270. (石井章訳・解題「メキシコの農業構造の社会的諸側面」[『アジア経済』第7巻第10号 1966年10月 87～96ページ])。なおこの

翻訳の原文は補筆改訂前の謄写印刷版である。

(注6) Stavenhagen, R., “Marginalidad y participación en la reforma agraria mexicana,” in Stavenhagen, *Sociología*…….

(注7) Stavenhagen, R., “Comunidad rural en los países subdesarrollados,” in Stavenhagen, *Sociología*…….

(注8) インディヘナ文化を国民文化(支配的なメスティーソの文化)に融合させ、インディヘナ住民をその国の生活の主流のなかに合体させることをめざす思想。

(注9) インディヘニズムを唱道する思想家ならびに実践家。

(在メキシコ市海外調査員 石井 章)